

令和2年度活動報告

<近現代の曹洞宗教団と布教教化研究会>

本年度は、上記未検証の諸問題の内、(1) 明治期の宗門僧侶養成・教育制度と、(2) 日清・日露戦争下における宗門の動向について、それぞれ再検証しています。

まず、(1) についてですが、明治初期から中期、当時の政策による神道中心の宗教制度やキリスト教布教解禁、そして西洋の啓蒙主義的教育制度は、各宗教団体内の近世からの布教方針、僧侶養成、そして宗旨・教学確立の面で混乱をもたらしました。

また、廃仏毀釈以降の宗門内外の混乱により、宗侶を取り巻く物質的・精神的状況は、なかなか厳しいものがあつたと、当時の諸々の史料や刊行物は物語っています。

本研究会では、長野・霊松寺住職であり、地域で指導的立場にあつた安達達淳師(1820～1904)に注目し、明治政府から三条教則を基礎に置き、かつ神道と共同での布教を要請される中、安達師の動向をまず検証しました。

次にキリスト教の布教活動が解禁となり、仏教各宗派は、その教義内容に疑念を抱きつつも、熱心な布教活動・方法に注目していた傾向にあつたようです。曹洞宗も例外でなかったことは、当時の刊行物への寄稿等でその思いを率直に述べています。

三条教則やキリスト教の存在は、当時の宗侶が持つ価値判断を揺るがすものであつた事でしょう。とはいえ、この変革期における宗門の動向についての研究は少なく、資料収集も完全なものとはなっておりません。現在、本研究会は資料収集を進めるとともに、外部に情報として発信できる論文作成を進めております。

(2) についてですが、『曹洞宗報』を中心に置きつつ、各宗派の動向や宗教系知識人の見解を掲載した『明教新誌』『仏教界』『新仏教』等の仏教系論説誌、そして宗門と縁の深い大内青巒居士著『宗教と戦争』(明治27年<1894>)等の文献を加味し、多方面から「いかに曹洞宗が二つの戦争を把握していたのか」を検証しております。上記文献の他に、国策との関連の深くなる明治中期以降に出された布達等の資料等も参考にして作業する必要を痛感しており、より広範囲の資料収集を考えております。

(1) と (2) で取り扱う原資料は、単純に「過去の史実の述記」、平たく言えば「昔話」ではありません。これらの資料は、当時の宗門活動に対する一般的価値判断や、変革期に追究された宗門理念を如実に表したものであり、今日に至るまで現代僧侶の在り方にどの程度の影響を与えたかを考察するための重要性を有しています。

よって、時代性の相違があるとはいえ、当時の事象・事物を省みることにより、今一度現在の曹洞宗の基礎を見つめ直すことに繋がるのではないのでしょうか。